2012年04月30日 中日新聞 朝刊 25頁

備える 3.11から　第42回　今こそ「阪神」（上）

木造 補強していれば

10万4000棟が全壊

犠牲者の8割圧死

中部地方を大地震が襲った場合、恐ろしいのは津波だけではない。震度7の地域を中心に建物が倒壊し、その範囲はむしろ津波の被害予想地域より広い。一九九五年の阪神大震災では、古い木造住宅を中心に十万四千棟が全壊。発生直後の犠牲者五千五百人の八割は圧死だった。研究者の間では、津波の恐ろしさを実感させた東日本大震災は「二時間目の授業」という。一時間目の授業・阪神大震災が教えた「耐震化の大切さ」を今こそ思い出したい。（中村禎一郎）

阪神大震災で崩れた故上岡房治さん宅。上岡さんは下敷きになり亡くなった＝神戸市長田区で

父親の上岡房治さん＝当時（八二）＝は多くの遺体が並ぶ薄暗い高校の体育館に横たわっていた。ほこりで白くなっていたが、穏やかな表情に感じた。室田千江子さん（七五）は顔のほこりを拭こうとほっぺに触れる。

手に伝わったのはゴツという感覚。その瞬間、胸がドキンと鳴ったことが今も忘れられない。もがき苦しみ父が死んでいったことを悟ったからだ。口の中はがれきで埋まっていた。

「決して安らかな最期じゃない。動けない中、力いっぱいがれきを吸い込んだんやな。つらかったやろな」。

父は神戸市長田区の木造平屋に住んでいた。戦前の建物は阪神大震災で倒壊。生き埋めになり、運び出された時には息がなかった。

室田さんの実家は父と母とみよさん（九八）の二人暮らし。建物は父が五八年に買った。父は若いころに宮大工を経験。家の手入れを欠かさなかった。

阪神大震災で各所から火の手が上がる神戸市街地＝1995年1月17日午後４時20分すぎ、本社ヘリ「おおづる」から

無関心 今でも後悔

シロアリが出ると軒下に潜り込み、柱を直した。「この家は石の上に柱が載っているだけ。地震が来たらひとたまりもないな」。冗談っぽく笑っていた。

震災を境に、父の白い顔が寝ていてもまぶたに浮かび、目が覚めた。「地震」と聞くたび、積み木を崩したような自宅に埋められた父を思った。

当時は神戸に地震が来るなんて想像もしていなかった。震災は「想定外」だった。室田さんは結婚し、神戸市北区に両親とは別の家を建て、現在もそこで暮らす。住宅メーカーの営業担当者が「壁に筋交いが入っていますから」と言っていた気がする。

関心がなかったから「ふーん」と聞き流していた。震災後、担当者の話を思い出す。結果的に、両親を「危険な家」に住まわせ続けた。「恥ずかしい」。失われた命は戻ってこない。

生き埋め、届かぬ声

荻野恵三さん（七〇）と妻君子さん（七〇）は一階で寝ていた。ゴーという音とともに天井は落ちてきた。建物は崩れ、あおむけの二人のうえに屋根がかぶさった。

暗闇の中、身動きが取れない。何が起こったのか、分からない。はじめは「自宅に自動車が飛び込んできたかと思った」。恵三さんは言う。

二人が住んでいたのは、七五年に建てられた神戸市東灘区の木造二階建て中古住宅。耐震など考えたこともなかった。どこに何があるのかも分からない状況で、君子さんは「助けてぇ」と叫び続けた。しかし、声は外に届かない。救急車のサイレンやヘリコプターの音、「誰かいますか」と叫ぶ外の声は聞こえるのに。

君子さんの声で舞い上がったほこりが、恵三さんの鼻やのどに入った。息は徐々に吸いにくくなった。余震も続発。君子さんの手のふるえは止まらない。しばらくすると、ガスの臭いが充満してきた。「引火して火事になったら」。恵三さんは「子どもたちだけは助かってくれている」と信じ、死を覚悟した。

どのくらい時がたったろうか。二人の耳に一緒に住んでいた二十五歳の長男の声が外から飛び込んだ。「生きてるか」。内側からの声は届かない。だから、恵三さんは足元の何かを思い切り蹴った。コンという音は長男の耳に届いた。「生きてる」。長男が大声を上げた。二人が近所の人たちに助け出されたのは、震災発生から七時間後だった。

「生き埋めになったけど、私たちは生かされた」。二人は今、そう確信し、各地で体験を語り続けている。「防災に役立ててほしいから」。阪神から十七年。時は過ぎたが、被災者の言葉からまだ学ばなければならないことは、少なくない。

―耐震化―

中部で遅れる対応

名古屋市は90万円補助

国土交通省のまとめによると、住宅の耐震化率は全国平均で79％（二〇〇八年）。中部七県で平均値を上回るのは愛知県だけだ。最下位は福井県の68％。次に71％の岐阜、長野両県が続く。古くからの木造建築物が残る地方で耐震化が進んでいない傾向が鮮明に表れている。

耐震性が問題視されるのは、主に建築基準法が改正された一九八一年以前に建てられた建物。改正前は震度5強程度で損傷しないことが求められていたが、改正後は震度6強程度でも、生命に危険が及ぶ倒壊や崩壊が起きないことが要求されている。

住宅・建築物の耐震化率の現状（県別）

※国交省資料から作成

	住宅 現状の耐震化率 → 2015年の目標としている耐震化率	小中学校（公立） ※10年4月1日現在	病院 ※09年調査	防災拠点となる公共施設など ※10年3月31日現在
愛知県	82% → 90%	91.9%	55.0%	87.8%
三重県	78 → 90	92.1	56.5	87.5
岐阜県	71 → 90	77.3	50.5	75.4
長野県	71 → 90	82.5	50.7	73.5
福井県	68 → 90	71.5	59.7	68.8
滋賀県	78 → 90	81.1	75.0	75.4
静岡県	79 → 90	94.3	74.7	86.5

建築基準法の改正はさかのぼって適用されないため、八一年より前の建物は耐震化されないままの例が多い。

名古屋市の平均では耐震化に必要な費用は二百四十万円。最大九十万円の市の補助を活用すれば、百五十万円で耐震補強できる計算だ。

一方、名古屋大減災連携研究センターの隈本邦彦客員教授によると、仮設住宅の建設には一軒当たり二百万～四百万円もの費用が必要になる。隈本客員教授は「耐震化を急ぐべきだ。国は地震が起こった後に税金を使うのではなく、備えに使うべきだ」と指摘する。

小中学校や防災拠点施設も耐震化率は全国平均で70％台前半（一〇年）。25％以上が耐震化されていないことになる。さらに、病院に至っては耐震化率が56・2％（〇九年）にとどまる。国交省は二〇年に住宅の耐震化率95％を目指しているが、実現にはさらなる努力が求められる。

次回は5月14日掲載。引き続き阪神大震災をテーマに考えます。

命を守る

地震による建物の崩壊から命を守る方法には、大きく分けて三つの選択肢がある。Ⓐ建物の耐震化とⒷ一室だけを強くする耐震シェルター、Ⓒ寝床を守る防災（耐震）ベッド。今後の自分の人生や経済状況を考えて方法を選択したい。

Ⓐ木造住宅耐震化の一般的な流れ

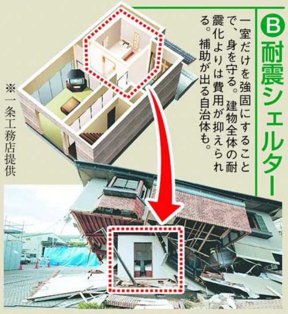
1. 自治体による耐震診断
   1981年5月31日以前の建物が対象
   自治体により無料の場合も
2. 補強計画の作成
3. 耐震補強工事
   補助制度のある自治体も
4. 耐震化完了

住宅耐震化

耐震診断や耐震工事に補助が出る自治体が多い。補助額も異なるため、住んでいる自治体に問い合わせてみると良い。名古屋市内では耐震費用が平均240万円。最大90万円を補助する

Ⓑ耐震シェルター

一室だけを強固にすることで、身を守る。建物全体の耐震化よりは費用が抑えられる。補助が出る自治体も。


※一条工務店提供

Ⓒ防災ベッド

最も手軽な方法。各メーカーから多くのベッドが発売されている。やはり、補助のある自治体もある。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています